

非ステロイド性抗炎症薬による喘息発作

英語名：

■ごく最近国際タスクフォースで提唱されている名称：NSAIDs-exacerbated respiratory disease (N-ERD),¹⁾

■最近の10年間でよく用いられてきた名称:Aspirin-exacerbated respiratory disease (AERD),¹⁾

■過去数十年にわたって用いられていた歴史的名称で今では用いられない：Aspirin-intolerant asthma, Aspirin-induced asthma (AIA)^{2,3)}

同義語：アスピリン喘息、解熱鎮痛薬喘息、アスピリン不耐喘息、NSAIDs 過敏喘息



A. 患者の皆様へ

ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

「^{ぜんそく}喘息発作」は、医薬品によって引き起こされる場合もあります。アスピリンなどの非ステロイド性抗炎症薬^{こうえんしょうやく} (NSAIDs) あるいは解熱鎮痛薬^{げねつちんつうやく} でみられ、また総合感冒薬 (かぜ薬) のような市販の医薬品などでもみられることがあるので、何らかのお薬を服用していて、次のような症状が見られた場合には、医師に連絡して、すみやかに受診してください。

「息をするときゼーゼー、ヒューヒュー鳴る」、「息苦しい」
「鼻や喉が詰まって苦しい」

受診する際には服用した医薬品をお持ちください。なお、喘息の治療中で、あらかじめ、吸入や緊急時の医薬品の服用など、指示された処置がある方は、まずそれをおこなってください。

1. NSAIDsによる喘息発作とは？

アスピリンに代表される非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) あるいは解熱鎮痛薬によって、喘息発作や鼻づまりが急激に悪化する喘息のタイプです。N-ERD、AERD、アスピリン喘息、解熱鎮痛薬過敏喘息とも呼ばれます。しかし、アスピリンだけでなく、ピリン系、非ピリン系に関わらずほとんどの解熱鎮痛薬が原因となります。医療機関で処方される非ステロイド性抗炎症薬だけでなく、市販のかぜ薬や解熱鎮痛薬の多くにアスピリンなどの非ステロイド性抗炎症薬が含まれています。また、ほとんどの痛み止めの坐薬、塗り薬、貼り薬などにも非ステロイド性抗炎症薬が含まれています。

症状は特徴的であり、典型的な発作では、原因となる医薬品を服用して短時間（多くは1時間以内）で、鼻水・鼻づまりが起こり、次に咳、喘鳴（ゼーゼーやヒューヒュー）、呼吸困難が出現し、徐々にあるいは急速に悪化します。意識がなくなったり、窒息したりする危険性もあり、時に顔面の紅潮や吐気、腹痛、下痢などを伴います。軽症例で半日程度、重症例で24時間以上続くこともあ

りますが、合併症を起こさない限り、原因となった医薬品が体内から消失すれば症状はなくなります。

注) のみ薬や坐薬だけでなく、外用薬（塗り薬や貼り薬、一部の点眼薬）で症状が現れることもあります。症状の発現までに時間がかかり、医薬品と症状の因果関係が分かりにくいこともあります。

また、解熱鎮痛薬喘息のうち、その約半数は患者本人も担当医も非ステロイド性抗炎症薬が原因であることに気づいていないと言われています。解熱鎮痛薬喘息には特徴があり、以下のような方は解熱鎮痛薬喘息の可能性が高いとされています。

- ・ 思春期以降、特に成人になってから喘息を発症した方
- ・ 女性（男女比 1 : 2 程度で女性に多い）
- ・ 通年性の鼻炎症状（鼻水、鼻づまり）のある方
- ・ 慢性副鼻腔炎（好酸球性副鼻腔炎）（蓄膿症）や鼻茸（鼻ポリープ）を合併している、またはその手術を受けたことのある方
- ・ 嗅覚異常、無嗅覚症（臭いを感じない）の合併のある方
- ・ アレルギー検査の結果が陰性（非アトピー型）の方
- ・ 季節に関係なく喘息発作が起こる方
- ・ 著明な末梢血好酸球増多（一部の血球の増加）がみられる場合

2. 早期発見と早期対応のポイント

新たな医薬品を使用した際に、「息をするときゼーゼー、ヒュー

ヒュー鳴る」、「息苦しい」などの症状に気づいた場合には、医師に連絡して、すみやかに受診（可能な限り救急外来）してください。受診する際には服用した医薬品をお持ちください。なお、喘息の治療中で、あらかじめ、吸入や緊急時の医薬品の服用など、指示された処置がある方は、まずそれをおこなってください。

喘息と診断されたら、非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）
かびんしょう過敏症を合併していないか、主治医に検討を依頼して下さい。解熱鎮痛薬喘息の可能性がある場合は、非ステロイド性抗炎症薬の服用を避けてください。その他にも避けるべき医薬品などがありますので、医師の指導を受けてください。

（参考）

専門病院においては、他の医療機関向けの紹介状や「解熱鎮痛薬ぜんそく喘息カード」のようなものを作成しているところもあります。医療機関を受診したり、薬局で医薬品を購入したりする時、これらを活用するなど、自分が「解熱鎮痛薬ぜんそく喘息（疑い）」であることを医師又は薬剤師に伝えてください。



※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、このホームページにリンクしている独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品 情報検索」から確認することができます。

<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>

※ 独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく公的制度として、医薬品を適正に使用したにもかかわらず発生した副作用により入院治療が必要な程度の疾病等の健康被害について、医療費、医療手当、障害年金、遺族年金などの救済給付が行われる医薬品副作用被害救済制度があります。

(お問い合わせ先)

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 救済制度相談窓口

https://www.pmda.go.jp/kenkouhigai_camp/index.html

電話：0120-149-931（フリーダイヤル）[月～金] 9時～17時（祝日・年末年始を除く）